

徳島ペンクラブ通信

第202号

2025年(令和7年)12月15日

発行

徳島ペンクラブ

1967年(昭和42年)創刊



本年度のとくしま随筆大賞表彰式が表記のとおり執り行われました。受賞された皆様、誠におめでとうございます。今回も多くの素晴らしい作品が応募され、心を籠めた審査の結果、各賞ろん、より広い世界に向かって雄飛されることを期待致します。

○とくしま随筆大賞 「一樹森なす」

天竹 勉 様
あまたけ もとむ

○徳島新聞社賞

「百年おうちの家終い」

松村 就子 様
まつむら もとこ

○優秀賞

「障害は個性か」 福永 夏利奈 様
ふくなが かりな
むらかみ よしの

「露座の大仏」 村上 瑛一 様
むらかみ てる いち

「飴の包み紙がルリタテハだつたなんて

津嘉山 郁子 様
つかやま いくこ

「砂時計」 大塚 達也 様
おおつか たつや
わいりいし ひろこ

「恋人以上恋人未満」 割石 禮子 様
わいりいし ひろこ
わいりいし ひろこ

「先生、僕はあの時、怪我をして…」

奥野 剛史 様
おくの つよし
ささの

「ふるさとの山…」 篠野 欽子 様
ささの きんこ
ちょうらく けんじ

「親愛なるばあちゃんへ」

「ふるさとの山…」 篠野 欽子 様
ささの きんこ
ちょうらく けんじ

「長樂 健司 様
ちょうらく けんじ

「苦味の向こう側」 麻野 佑羽 様
あさの ゆう
ささの

「苦味の向こう側」 麻野 佑羽 様
あさの ゆう
ささの

「柏木の自分で生きる」 山本紗瑛 様
やまもと さえ
ささの

「柏木の自分で生きる」 山本紗瑛 様
やまもと さえ
ささの

審査員 依岡隆児 徳島ペンクラブ会長 德島大学総合科学部教授

柏木康浩 徳島新聞社生活文化部記者

構 大樹 鳴門教育大学大学院准教授

竹内菊世 「飛行船」主宰 (敬称 略しました)



受賞者の皆様と審査員の方々 (写真 坂下栄治)

○令和7年度県民文化祭 2025年11月2日 於県立文学書道館1Fギャラリー

主催 徳島ペンクラブ

後援 徳島新聞社・四国放送・徳島県立文学書道館・徳島県民文化祭開催委員会

徳島ベンクラブの本年度の県民文化祭のテーマは、新聞記者の目で見た本県に関する文学作家の姿とその文学作品について、講演と対談を通して再考、再認識しようとした企画です。長らく徳島新聞社において文化部記者を務められ、作家とともに本県が誇りとする瀬戸内寂聴氏に関しての御造詣が深く、その他たくさんの方々が誇りとする瀬戸内寂聴氏について、講演と対談を通して再考、再認識しました。また本会会長であり、徳島大学総合科学部教授の依岡隆児氏との対談を通して、徳島県の文学の実態に迫ろうと企画し、これまでの徳島県出身の文学作家に関するエピソードにユーモアを交えて話しあって頂き、有意義で楽しい秋の一時を堪能致しました。

第一部 講演 「記者が見つめた徳島の作家と文学」

講師 徳島新聞生活文化部記者・「生誕100年 瀬戸内寂聴物語」著者 柏木 康浩 氏

徳島県出身あるいはゆかりの作家のうち、瀬戸内寂聴、生田花世、モラエス、野上 彰、北條民雄の五作家に絞って、パワーポイントによる映像を前に、エピソードを交えながら、有益な講演を堪能させていただきました。

第二部 対談 「徳島の文学と未来」 柏木康浩氏／依岡 隆児氏

徳島県出身あるいは所縁の文学作家は意外と多いが、県民性の所為かどうか、その作家の方々の顕彰に、他県と比べてあまり積極的でない傾向がみられる。他県を参考に、もっと当県出身作家はもちろん、当県ゆかりの作家の書を読む機会をつくり、当県を誇りとすると同じく、当県ゆかりの作家を県民の誇りとして称え、その文学について語り合うことが大事であり、それが新たな作家を生むことになる。——とのお二人の対談でした。

(尚、本県民文化祭のダイジェストは、坂井 陽氏筆により、『徳島ベンクラブ選集 part 43』に掲載されます。ぜひ一読ください)

○ 小説家 森内俊雄 文学碑建立にご協力よろしく。

小説『眉山』で知られる森内俊雄氏は、ご自身は大阪市生まれですが、ご両親が本県出身で、戦時下徳島に疎開しながらも空襲に遭い、危うく眉山に逃げて助かり、

そのことを文にしたのが小説「眉山」です。それ以後、五回にわたり芥川賞にノミネートされた徳島県ゆかりの作家です。彼はごなく徳島を愛され、そのことは、随筆『みちしるべ』に存分に書かれています。このように第一の故郷として徳島を愛した小説家森内氏の顕彰碑を、ゆかりの深い眉山に、でき得れば眉山山頂に建立致したく、鋭意計画中です。実現に向けて、皆様方のご助力、ご支援を心からお願い申し上げます。尚、具体的に計画が確定いたしました際は、別途連絡申し上げ、ご協力を頼ります。

○ 新しい会員をご紹介します。

この度、当会に、新しくお一人がご入会されました。心より歓迎申し上げます。自由に伸び伸びと文芸にご精進、ご活躍ください。

溝渕 吉弘 様 香川県高松市ご在住（鈴木綾子副会長紹介）

中本 祐子 様 徳島市ご在住（ホームページより自薦）俳句他

○ とくしまベンクラブ賞のリフォームについて。

徳島ベンクラブ賞は、各年度の『徳島ベンクラブ選集』に掲載された一般会員作品の各部門（散文部門・韻文部門）の中から、会員の投票により選出された作品に授与される賞です。文芸高揚の一助として、この賞の形をどのようにすれば最適か、絶えず検討を加えて改善に努めております。この度、各部門の1位・2位を選出し表彰する形態を探ることになりました。実情に即した最も形にするべく、今後ともいろいろと試行錯誤を致して参ります。ご期待ご協力ください。

このうち、散文部門に限り、ベンクラブ賞受賞作品は、徳島市の文芸集『まゆやま』（徳島市文化協会発行）に転載されます。

受賞おめでとうございます。

本会会員の方々の文芸コンクールにおけるご栄誉をお祝い申し上げます。

徳島県俳句連盟第62回大会（発表＆授賞式は10月12日）

徳島県俳句連盟主催

徳島県知事賞

第41回「小さな親切」はがきキャンペーン

読売新聞社賞

山之口 ト一 様

新開 英毅 様

渡辺 恵子 様

秋の文学散歩

令和7年10月5日



今年の秋の文学散歩は徳島市渭北地区（吉野本町、下助任町）の三寺院散策という形で十月五日に実施されました。心配されていた雨にも降られず、曇りの過ごしやすい天気となり、ペンクラブ会員十一名、ひまわり俳句会七名、まちライブラリービブリオとくら会員でご住職の福島誠淨さんの講話を拝聴しました。万福寺境内に井原西鶴の『好色五人女』の題材となつた八百屋お七の靈を慰めるために相手の吉三が建立したという「お七地蔵」があります。が現在の「お七地蔵」の供養塔は二代目のお地蔵さまで1982年（昭和57年）ご住職の退職金にて再建されたものだそうで、元々のお七地蔵は昭和20年6月すべて戦時下の供出でなくなつたとのことです。

はじめは当日の集合場所万福寺で、ペンクラブ会員十一名、ひまわり俳句会七名、まちライブラリービブリオとくら会員でご住職

の福島誠淨さんの講話を拝聴しました。万福寺境内に井原西鶴の『好色五人女』の題材となつた八百屋お七の靈を慰めるために相手の吉三が建立したという「お七地蔵」があります。が現在の「お七地蔵」の供養塔は二代目のお地蔵さまで1982年（昭和57年）ご住職の退職金にて再建されたものだそうで、元々のお七地蔵は昭和20年6月すべて戦時下の供出でなくなつたとのことです。

また境内には明治100年記念に1872年（明治2年）「庚午事変」の指導者を含めた4人の切



腹した若者を偲んで建立された碑があり、日本史上最後の切腹だったとのことでした。次に「三太郎大明神」



として祀られている阿波の豆狸に話が及びました。この狸は実在の狸でご住職の祖父（先代住職）がよく裏のお墓で遊んでいるのを見たそうです。その後この狸のお骨が見つかり祀つたのが今に至っているとのことで11月3日に祀つたのをきっかけに「阿波の狸祭り」が始まったとのことでした。その他にも台湾の仏教団との間のエピソード、俳人のおじい様、写真家で徳島新聞の写真部長をされていたおとう様が菊作りにも励んでいたという思い出話など多岐にわたるお話を頂きました。

その後、七曲の道を通一行は興源寺へ徒歩にて進みます。下助任町にある臨済宗妙心寺派寺院の興源寺は阿波藩主蜂須賀家の菩提寺である。家祖蜂須賀正勝は別区画にあり、藩祖蜂須賀家

政から13代裔裕までの墓所が並び、

中でも忠英の墓石は高さ4、2メートルもあり、全国屈指の規模のことでした。

墓所が林立する周辺一帯は助任

緑地・蜂須賀興源寺墓所として一般公

開されています。車通りから離れているのであまり知られていない場所です

が、ちょっととした散策にも良い場所か

と思います。「灯台下暗し」で地元も歩

いてみるといろいろな発見がありま

た。どうか宜しくお願ひいたします。

今夏、不思議な「縁」があり、中学1

年時の担任の先生が書かれた阿波の歴

史小説『芭蕉を夢みた男』に巡り合いま

した。私が中学1年生だった年は、昭和

44年ですが、父が3月の異動で脇町に

転勤することになり、私は進学するは

ずだつた北島中学ではなく、吉野川の

中流域にある歴史と伝統のある脇町中

学校に進学することになつたのです。

仲の良かった友達と別れることがで

シ

ひとりごと欄（眩きに感慨あり）

はじめまして！ 溝済 吉弘

高松から古い乗用車を走らせ、自動車道・大坂峠のトンネルを抜けると遠く吉野川平野の奥に眉山が見えてきました。子供の頃に住んでいた大麻町板東あたりから大谷、撫養方面へと東進し、自動車道が大きく右に曲がって南進します。子供の頃に住んでいた大麻町板東始めころには、眉山は、標高が倍以上ある中津峰・旭が丸などを背景として見えています。

上板町七條で生を受け、板東、鷺敷、北島、脇町を経て佐古に一時期住み、城西中学から阿南高専へと進学した私にとつて眉山など阿波の山々はとても懐かしい存在です。21歳から69歳まで、香川県内を転々として働いてきましたが、58歳からは都内の通信制のある大学の文学部に籍を置いて歴史を再び学び始めました。そして徳島市内の本屋で「阿波の歴史を小説にする会」の小説集に辿りついたのです。この度、皆さまの仲間に入れて頂くことになりました。どうか宜しくお願ひいたします。

担任の先生とは、僅かな「縁」でした

が、今夏、先生が書かれた歴史小説に出

会った不思議さを、ここで「ひとりごち

な感じで、中間・期末などの試験の結果に到達させた年でもあり、とても賑やか

な年でした。担任の先生は、少しクールな感じで、中間・期末などの試験の結果に到達させた年でもあり、とても賑やか

な年でした。担任の先生は、少しクールな感じで、

自ら薪を集めて火を焚いて、野菜を煮込み、魚を炙つては自然とともに生き続ける。城主の座を追われる不自由があつたにせよ、転居や職業を選択できない時代に、高い空を仰ぎ、農林漁業から味わう春夏秋冬の控えめな生き方に、日々満たされていった。その後に幕府への赦免願いを薦められても「その考えはない」とピシヤリ、と断つた。大砲が放つ煙に覆われる中で、刀を振り回した合戦や、植え付けも収穫する喜びもない年貢米を頂くだけの武家社会の虚しさに何かを感じていたのではない。江戸よりも一〇度も高い温暖な島民生活五〇年、多難と平穏が交錯した八四年の生涯を生ききつた。流人たちとともに眠る慎ましき墓石近くには雨にうたれる明日葉がうなづく様に揺れていた……

リレー エッセイ
モルフオ蝶の話 伊丹悦子



青ムラサキに光る蝶が翅を開いて、わが家の廊下の壁に張り付いている。真夜中に見ると更に神秘的だが、この蝶たち、実は額縁の中でも身動き一つ出来ない。数えてみれば数十羽の、色とりどりの翅が寄せ集められている。もう二、四十年も前になろうか。若い頃ブラジルに移民していたトシさんから聞いたものだ。わたしは「ブラジルの蝶」と呼び、大切にしていたが、一方では閉じ込められたこの蝶たちを何とか広い世界へ解放してやれないものか、と思い続けていた。そんな折、こんな詩ができた。

——夜目にも碧い蝶の翅 瞬きひとつでひらひらと飛び

たつでしよう 額ぶちの中からいつせいに 希望のよう

『アフタースクール』
作者の第3詩集。出版元・あゆみ書房は著者の娘で作家

の中村あゆみさんが起ち上げたひとり書房。

表題作

『アフタースクール』

(放課後)

は、抱えきれ

ない悩みを消化できぬまま社会に出て行った教え子

たちへのエールのような響きを持つ。これからも続く

お互いの人生の放課後。肩肘張らず、生きていくことの大切さを呼びかけている。

——夜目にも碧い蝶の翅 瞬きひとつでひらひらと飛び

たつでしよう 額ぶちの中からいつせいに 希望のよう

に舞い立つでしよう(中略)硝子ケースにはめ込まれるかな旅の思い出に ぶらじる土産の色とりどりの翅

翅 翅 翅 その文様の 仮装の目玉よ何を見つめる――

(中略)――そんなもんで 貧しい蝶捕りたちはみな

哀しみの鱗粉でひたひたひたと 眼を病んだ

(『ブラジルの蝶』より)――この詩が活字になつた折に、

フと思いついて、紙上に乗せてできるだけ遠くへ飛ばせてみた。すると何処まで飛んで行ったのか、未知の方から思いがけない便りが届き、「翅に目玉模様があるのなら、それはモルフオチョウでしよう」と教えてくださいた方が居た。

また別の方は「その蝶はいつかどこで見たことがある。再び出会えて嬉しい」。そしてまた「蝶は靈魂だ。お盆には帰つてくる、などという便りもいただいた。蝶たちを何かのかたちで解き放すのがせめてもの供養だと思つていて。美しい蝶たちよ、もつともっと広い世界へ飛んでゆきなさい。

「蝶採りたちは皆、眼を病んだ」と、これはトシさんから直接聞いた話だが、日系移民が多かつたブラジル、サンントスとはどんな所だろう。現地での生活は、言うにいわれぬご苦労があつたとのこと。あの時もつと色々聞いておけばよかった。そのトシさんも、今はもう靈魂となられた。いまごろは身軽になつて蝶のようにどこかを飛んでおられるだろうか。

絵本『十二支のかきぞめたいかい』
十一支の漢字知っていますか?

ペンや筆を持って字を書く楽しさを伝えたいと思い、この絵本を制作しました。新しい年が幸せになることも願っています。十二支の辞書代わりに手元に置いていただけると嬉しいです。「山崎双花」は私のペンの雅号です。絵本を描き始めからペン習字を習い出し、日本ペン習字研究会の師範を取得しました。絵本の中の書は、私自身が筆を持って書いています。どうぞ、読んで下さいますよう、よろしくお願ひいたします。

十二支の漢字書けますか?

十二支の漢字書けますか?